

巨大都市・東京を考える



コロナで東京五輪がまもなく強行される。4日に投開票された東京都議選でも、五輪開催の是非が争点になった。町村敬志『都市に聴け』を読んで、東京という巨大都市の過去から現在について多くの知見を得た。第7章のさいごを抜粋して紹介しておきたい。

東京は巨大な都市である。広がりと集積の規模という観点からみたとき、東京と比較可能な都市は、ニューヨーク、ロンドン、モスクワなど、世界でもそう多くはなかった。だが、東京の個性をもしひとつだけ挙げるとするならば、それは単なる巨大さではない。巨大化する都市に突き付けられる諸要素を飲み込んだうえで、都市の構造を外側と内側に向かって掘り崩しながら、混然一体のものとして生成し直していく力が、東京では随所に作用していた。結果としてできあがる都市は決して美しいとは言えなかった。歴史的厚みが光っているわけでもなかった。雑然として貧相ですらある。かといって単に無秩序というわけではない。住民は以前から都会人らしく互いに距離を取ることに余念がなかった。猥雑と言うには東京は冷たく、秩序志向で権力的な都市でもあった。

2020年に向けて東京では再開発が続いてきた。だが全体としてみた場合、東京で大きく変化しているのは一部の地域に限られる。東京はむしろ変化しにくくなっている。コロナ問題を経て、東京一極集中の流れにも潮目の転換が訪れようとしている。いまある都市をどう使い続けていくのか。老朽化や再編の進む都市では、街の至るところでひび割れやすき間が顔を出す。多様な出来事がそこに自らの在り処を見つけ出してきた。そうした在り処は決して特別なものではない。むしろ日常的あるいは陳腐ですらあった。

都市は誰のものか。この問いは、当初からアーバン・スタディーズの根幹にあった。そしていまも重要性を失っていない。都市は人びとのためにある。その通り、答えはまちがっていない。だが、人びととはいったい誰なのか。

都市形成の基盤を考える議論の基礎にはこれまで、市民社会論やコミュニティ論が置かれることが多かった。そこで重視されたのは、都市の担い手として、市民社会の主体あるいはコミュニティの主体をつくりだすことであつた。ぶれない主体、民主的な主体、連帯する主体は確かに大切であり、なお意義を失っていない。

しかし実際の都市をみると、もう少し異なるアプローチが必要であることにも気づかされる。グローバル化や個人化、格差や分断といった現実から出発することを、現代都市は迫られている。東京も例外ではない。都市に関わるアクターが多様化している現在、「誰か」を問うている余裕はもはやない。誰を問題にするまえに、まずは誰に対しても開かれる可能性をもった場所として、都市を構想すること。このことへの挑戦を新しいアーバン・スタディーズは求められている。

(2021年7月8日)